

生誕  
110年  
中原中也

◎特別寄稿

全集は終わってから読む火のほうへひとりがひとつになれる石へと

カニエ・ナハ

◎トークイベント

中原中也と山口発「朗読屋」  
地域ドラマ  
～荻上直子が見つけた中也の魅力～

◎エッセイ

字面は中也・音では秋聲、  
「中世」という言葉に  
二度騙される毎日

薮田由梨

◎テーマ展示

「私が選ぶ中也の詩」

◎特別企画展

「太宰治と中原中也」

◎企画展

「DADA 1916→1923 ツアラそして中也」  
「中也、この一篇——「サーカス」」

◎新収蔵資料紹介

竹下彦一宛中原中也葉書  
山岸光吉宛中原中也葉書  
山岸光吉宛献呈署名入り『山羊の歌』

◎記念館ニュース

ぼうしの詩人賞～あつまれ！未来の中也たち！～  
山羊の日

主なできごと（平成28年度 行事記録）

第22回中原中也賞受賞作品  
平成29年度 行事予定

# 中原中也記念館 館報2017

22

Public relations magazine  
第22号

*Nakahara Chūya Memorial Museum*



# 全集は終わりから読む火のほうへひとりがつひとつになれる石へと

text & photo=Kanie Naha  
カニエ・ナハ

火曜日には中也の詩集をひもときます。なぜ火曜日なのか。漠然とかれは烈火のような、とかおもっていたが先日あそうか、かれは秋の詩人なのだ、と思いついて、それでかれは火の詩人なのだ、と春に生まれた中也は、春にもよい詩が多いし(たとえば「春の日の夕暮」)、夏にも冬にもよい詩が多いけれど(たとえば「夏の夜の博覧会はかなしからずや」「冬の長門峡」)、秋に逝った中也には、秋の詩にはなおいっそう、傑作が多い気がします(「秋」「盲目の秋」「曇つた秋」)あたりを私は中也の詩の最上ものと考えているのだけど、それらはどれも組曲、ともいうように大胆に展開していく詩で、それは秋という季節のめくるめく速度で

うつろっていくことと相似しているようにも見える)。そして、あるいは中也の人生はその大半が秋だった、と言いうるかもしれない。そう思つて、中也がさいごに書き遺した四行詩をあらためて見直すと、その二行目に、「煥発する都会の夜々の燈火を後に」と、火の字が、部首を含めると短い一行の中に三つも出てくることに気づく。その火を、生そのものであつたとしてもいうように、背中にして立ち去つてしまふ。あらためて、なんて淋しい詩なのかこれは。そもそもここに出てくるおまへとは誰なのか。静かな部屋とはどこなのか。

煥発する都会の夜々の燈火を後に、おまへはもう、郊外の道を辿るがよい。そして心の眩きを、ゆつくりと聴くがよい。

歌人で詩人の中家津子さんとふたりで朗読ユニットを組んでいるのだけど、彼女とのユニットとして出演をして、ここで中也の短歌を朗読することにしたのだ。『中原中也全詩集』(角川文庫)に載っている一〇七首の中から、それぞれ五首ずつ選んで、交互に読むことにした。かぶつているかもしれない。かぶつていなくてもかぶらなかつただけだ。私が選んで読んだ中也の短歌五首を順に見ていくと、



私の中也関連文庫本コレクション。表紙に中也のポートレートが使われているものは、例の帽子のポートレートばかりであること、本ごとに微妙に色調が違うことに、気づきます。(2、3頁の写真は筆者撮影)

か舌のうえでころがしてきて、「命なき石の悲しさよ」まで一気に読むと読みやすい、ということに気づいて、そこまで傍線を引いておく。あとで中家さんに言われて気づいたのだけど、五七七七七の、真ん中の「五」がごっそりと抜け落ちている。それを中家さんは「欠落感」と言っただけで、こんな破調の歌を、しかも破調とも思わずに私は選んでいたのだった。中也は蹴ること、あるいは欠落させることで、命なき石に悲しさという命を吹きこんでいる、とも言えるかもしれない。

その後の中也の詩を読みこんでいる私たちに、この「淡き煙」は死者の象徴あるいは死者そのものに見えて、もつといえは、中也がすでに死者である、宙を指す自分の煙を眺めている、ようにも見える。この歌は、たとえば後の「骨」の原型なのだ、などと言つてみたい気がする。大河に投げんとしたるその石を二度みられずとよくみいる心

てそんなに見入る、石とはいったいななのか。ここでは、この石がまるで心の鏡のようにも見えてくる。石が心の鏡なのか、心は鏡の石なのか。

あるずつと昔のこと(それがなんだったのか、夢の中のように茫洋としている)をひっぱりだして、その弁解をはじめめるのだけど、それはこのように書きだされる、

ユラユラと曇れる空を指してゆく淡き煙よどこまでゆくか

先に引いた歌で「命なき石」といいながら、そこに悲しみという命を石にふきこむようでもあつたけれど、中也にとつ

また川だ(……というつながりを、とくに意識せずに選んだのだけれど)、先の歌の「大河」は、あるいはこの犀川のこ

この「此方」はまるで「此岸」と言っているようにも読める。先をつづける、

暗(くら)の中に銀色の目せる幻の少女あるごとし冬の夜目開けば

安原喜弘著「中原中也の手紙」(講談社文芸文庫)に出てくる、中也の最後の手紙は、中也の死後に安原のもとに届けられた、書かれた日付は昭和十二年十月五日で、中也が亡くなる二週間とすこし前、「発病の前日」に綴られたとのこと。熱に浮かされたような長文の手紙で、前半、「観念運動」とか「エラン・ヴィタール」とかむつかしい言葉を使いながら「安さん」をたしなめたあと、後半はなにやら唐突に、

かつて僕が北千東にいて神経衰弱を患つた頃一度叱られました、その時は僕はその前日あたり目蒲の駅の出口に待合して安さんが一時間も遅れたので愚痴ったことを叱られたのだと思つておりましたが、その後次第に何かの折に勘付いた所によると、妹さんに対してとんでもない考えを抱いたというので叱られたのではないかと思うのです。今以て果して何れかハッキリは分りませんで、(今頃になってそんなこと云々と仰います。僕としては訊ねそびれたのですし、訊ねようと思つてもひどく訊ねにくかつたのです)がもし後者の方で叱られたのでしたら僕としては心外のことです。



詩人が私の幼い妹に対してなにかとんでもない考えをもっていたと私が疑うなどとは、それこそんでもない話である。私には何のことか全く考えられないことである。ただただ驚き入るばかりである。

第一、私の妹は昭和の初め頃、まだほんの子供に過ぎず、詩人が知る筈はないように思う。

あるいはそれは、死期のさし迫った詩人の脳裡にあらわれた、幻の少女だったのかもしれない。安原の文章の先をつづけると、

しかし詩人の神経衰弱の頃私は詩人の呼出しを受けて連日連夜彼の側近に通いつめ、介抱にあたっていたのだが、当時私の家庭生活は妹が病弱な母のベットであったので或点で妹を中心に動いていたともいえる状態であったから、私が家の都合でいつの日か呼出しの時刻に遅れた時、詩人が不満を述べたのに対し、そのような家庭の都合を理由に弁解をしたこともあったかも知れない。

と書いたあと、「これは詩人の私への大いなる遺産、詩人が最後に残していった私への疑惑である。まことに心重い次第である。」そして一行あけて、

くだんのドラマ「朗読屋」の、なぜかPR番組にも出演させていただくことになり、そのロケで、三日間で山口の中也にゆかりのある、いろいろな場所をまわらせていただいた。あらかじめ、この場所ではこの中也詩を、と指定されたものもあるし、それ以外にも、私が読みたいものも読ませていただいた。長門峡で読むことになっていた、「冬の長門峡」を、撮影の前、どのように読んでいいか私はわからなかった。私は直前にロケ車の中で、「中原中也の手紙」の中の、安原が中也との長門峡の思い出を書いたくだりを読み返していた。長門峡をたどっていくと、それは私には、異界へとつづく長い門のように思われた。安原の文章、すこし長いだけでなく、とても大切な文章のように思うので引きます。

長門峡では俄雨に襲われた。岩を噛む清流は忽ち滔々たる濁流となった。私達は岩陰にあるたつた一軒の休み茶屋の縁に腰を下ろし、耳を聳する流の音を聞きながら静かに酒を汲んだ。彼は少しずつではあるが絶えず物語った。やがて真赤な夕陽が雨上りの雲の割れ目からこの谷間の景色を血の様に染めた。

ここで中也「冬の長門峡」の五連目「やがて密柑の如き夕陽」と響きあう。中原と安原のふたりの夕陽が重なりあう。安原の引用をつづけます、

この手紙に対して最早や私には訊ねるすべも答えるすべも残されてはいない。

という、哀切をとおりにこした悲痛極まる一文で「中原中也の手紙」は閉じられていくのだけれど、先に書いた、私たちが出演した短歌のイベントで中家さんが選んだ中也の五首のなかに、

冬の朝床の中より傍の友にゆふへの夢語るなり

があつて、ここに書かれている友は安原のことではないけれど、中原の生涯の傍の友であつた、安原にこのように夢を語ったこともあつたかもしれない（「冬の朝」はすでにあちらの世界であつたかもしれない）。あらためて、中原と安原、と並べて記してみると、ふたりはひとつの原にいて、たましいの兄弟のように見える。（おなじように、アルチュール・ランボーと中也は、チュー（宙）でつながっている、かれらもまたおそろくはたましいの兄弟なのだ。）

「中原中也の手紙」で安原から中原への返信が載っていないのは残念なことにはちがいないけれど、読者である私は、中原から送られてくる手紙ばかりを読みつづけるうちに、あたかもそれらが自分宛てて書かれたように錯覚しだして、しだいに頭の中で中原への返信を書きだす

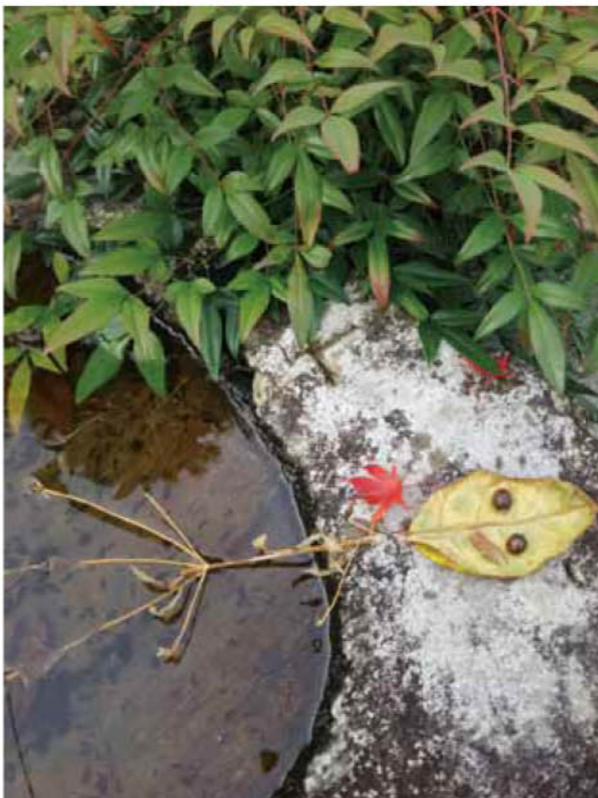
詩人は己を育てたこの土地の中に身を置いて今しきりに何事かを反芻するものの如くであつた。そしてそれを私に語ろうとした。然しながら彼の顔には何事か語り尽し得ぬ焦燥と失望の色が漂うのであつた。私は今もそれを思うのである。何事でもあるか。

帰途彼は汽車で途中まで私を送つて来た。彼は未だ何か私を離したくない様子であつた。何事か重大な事柄が彼の心の中に残されている風であつた。途中天神様のある古風な町で下車してそこをうらさびた街々をあてもなく道を通つた。彼は遂に語りなかつた。私は夜遅い汽車で東に去つた。

私はそのとき彼の語らなかつた、語ることでできなかった何事に思いを馳せながら、「冬の長門峡」を朗読していた。それはそのまま、この詩の、豊かというにはあまりにも茫洋とした余白に呼吸しているように思えた。音さえも余白に呑みこまれてしまふような絶景だ。そしてそのとき、私はこの詩がともわかつた、と思つただけけれど、いまはまた、わかなくなつてしまつた。しばらくたつてからテレビの中で、私がこの詩に出てくる「密柑」のことを、冬の太陽のようだと、それを死後の世界から眺めているようだと、そんなふう語っていた。その私もまた、向こうがわの世界からのよう

始末だつた。おなじように、中原の声の録音が残っていないことは、おなじく残念なことにはちがいないけれど、あるいは中原の詩にとつては幸福なことともいえるかもしれない。中原は朗読魔だつたようだけれど、名刺がわりのように会うひとと会うひとに「サーカス」を朗読して聞かせたというエピソードを、あるいは長谷川泰子に書きあげたばかりの詩を朗読して聞かせたというエピソードを、思い出すにつけ、中原にとつては、あるいは紙の上と等価というくらいに、声にのせることを、自分の詩のひとつの完成形と見ていたかもしれない、と思う。詩は声に出して読まれるとき再生する。黙読するのと朗読するのは、おなじ読む行為でも、まったくべつの行為だという気がする。目に入ってきた詩は網膜をふるわせないが、耳に入ってきた詩は鼓膜を

ふるわせる。ましてや声にだしたとき、その詩は私たちの肺を喉を、やがて全身をふるわせるだろう。先日（二〇一七年一月十八日）放映されたNHKBSプレミアム山口発地域ドラマ「朗読屋」で（このドラマに、私も中也賞のご縁でほんの少しだけ出演させていただいたのですが、）私にもっとも刺さつたセリフの一つは緒川たまきさんが演じた早川という人物（ここにも「川」だ）が発した、「朗読をなめるな」というセリフだつたけれど、朗読はたしかに危険、一歩（一音）まちがえると牢獄にも猛毒にもなる。にもかかわらず、私は朗読することをとても肯定したい。なめるな、といわれても。朗読されることで、詩は再生するから。たとえ百年前に書かれた詩でも、朗読されることで、現在の私たちの身体を、現在の空気を、ふるわせることができるから。



「朗読屋」PR番組の撮影のため訪れた権現山にて。地元の子どもが遊んだあとでしょうか。中也と文也もこんな遊びをしたかしら、とか、これは中也か文也の精霊かしら、とか。

声をしていて。

ところでその日は、「朗読屋」が放送される日で、ほとんど一日中と言つていいくらい、中也の関連番組をやっていたのだけれど、その日私は、町田康さんと吉岡秀隆さんと、ひと月半過去の私と、それぞれちがう時間のなかで、ほとんどおなじ場所で、おなじ詩を朗読するのを聞いた。私の朗読のつたないことはさておいて、ジャズ音楽（あの幸福な、お調子者の「」の愛好家としては、スタンダードナンバーがそれぞれの解釈で、それぞれのかたかで演奏されているようで、興味深かった。それぞれの読みかたや呼吸間のとりかたやのなかに、言葉で語る以上の解釈が、感想以上の感想が、表現されていくかもしれない。

毎年、中也の誕生日に記念館で開催されている「空の下の朗読会」、私はこれまで二度、参加させていただいたのだけれど、そのいずれにも地元の小学生が参加されて「汚れつちまつた悲しみに……」を朗読されて、それはあまりにも微笑ましく、きみたちまだちつとも汚れちやいなや、とか思ってしまったのだけれど、よくよく自分が彼らのころのことを思い返すと、その時分なりに汚れても悲しんでもいたことを思い出す。中也はこの詩をどんなふう朗読したのだろう。文也はその声を聴いたのだろうか。



### カニエ・ナハ Kanie Naha

2010年「ユリイカの新人」としてデビュー。2014年に詩集『オーケストラ・リハーサル』、2015年に詩集『MU』が中原中也賞最終選考にノミネートされ、2016年に詩集『用意された食卓』で第21回中原中也賞を受賞。2017年1月、NHK山口発地域ドラマ「朗読屋」に出演。併せて同番組のPR番組「中原中也と『朗読屋』～ことばの源流を訪ねて～」にも出演する。また、装幀家として暁方ミセイ『ウイリスちゃん』（思潮社）他多数の詩集を手がけている。

そんな子どもを思いながら今日も私は中也の詩を声に出して読む。そのからだに火が灯る。中也の詩を朗読すれば、何曜日だつて火曜日なのだ。さあ今日はこの詩を読もうと、息を吸う、そのとき、私の耳もとに聴いたはずのない、だけどたしかに中也の声が聴こえる。それは「朗読屋」では緒川たまきさんの早川の声だつたけれど、いまはたしかに中也の声で、「朗読をなめるな」と。





# 山口発地域ドラマ 中原中也と「朗読屋」

～荻上直子が見つけた中也の魅力～

平成28年12月10日(土)  
於・山口大学吉田キャンパス 共通教育棟1番教室  
司会・田中秀喜アナウンサー(NHK山口放送局)

平成29年1月18日、NHK山口放送局制作の地域発ドラマ「朗読屋」が放送されました。このドラマでは、中原中也の詩と朗読が重要なモチーフとなっています。ドラマの放送に先駆けて、脚本を手がけた映画監督の荻上直子さんと、当館館長・中原豊が、今なお多くの人に愛される中也の詩の魅力について語り合いました。

中也について「帽子とマント、新宿で飲んでケンカしている」イメージだったという荻上さん。落第したり、一生仕送りに頼っていたり……という中也のダメ人間ぶりから、話題は広がっていきました。

**中也の詩は「痛い」**  
—中也の詩についてはどのような印象をお持ちですか？

荻上 言葉が胸に刺さって痛い、というのが中也の詩に対する自分の率直な感想だったので、中也の詩から、絶対的な孤独みたいなものが悶々と醸し出されている感じがしました。そういうことが人々に刺さるのでしょうか？

中原 「痛い」という言葉で連想したのが、中也ファンでも誰かに「中也が好きだ」と言うのは恥ずかしいと思う人が多いことです。どうしてだろう？ と思うと、中也の詩が自分の心の中の一番柔らかい部分というか、あまり人に見せたくない、ものすごく微妙な部分に触れてくるから

ような思いがあふれています。自分でも理由はわからないけれども、その大切さは皮膚感覚で伝わってくる。そんなところが魅力的な詩かなと、自分なりに思っています。

**—荻上さん、いかがでしょうか。**

荻上 少し話がずれるのですが……。今、上野の美術館で「ゴッホとゴーギャン展」という展覧会をやっているのですが、ゴッホの絵って、絶対的な孤独感みたいなものがひしひしと来るんですよ。この詩から思い浮かぶ映像が、それを連想させてしまったらして、中原中也って、詩人なんだけど、あつ、芸術家なんだなと思つて。百年も、二百年も残っていく芸術って、絶対的な孤独感みたいなものが人に突き刺さってくるのだと思いました。

**—そのほかに荻上さんの中に響く部分と**  
**いうのはこの詩にありますか？**

荻上 私、今4歳の双子がいるんですけど、小さいポタンを大切に感じるに、自分の子どもが何となく思い浮かんでしまうような感じがしました。

中原 自分にとって身近な存在を愛おしんでいくという感じでしょうか？

荻上 はい。

中原 この詩は文也が元気だった頃に書かれた作品なんですけれども、そういう

ではないかと思うんですね。そういうところまでさらけ出すことになってしまいうので、「中也が好き」とストレートに言えない。

「痛い」というのもそれと似ていて、心の中の一番デリケートな、すぐに言葉にできないような部分に、中也の言葉がすつと触れてくる感じ、そこには寄り添ってくる感じもあるのかなと思います。

—ドラマでは主人公が妻に去られ、仕事も失うという喪失の場面から始まります。先ほど荻上さんは、中也の詩に孤独な感じがあるとおっしゃいましたが、主人公の孤独と絡んでいくような場面はありますか？

荻上 そうですね。お酒飲んでつらいし、自分の状況もつらいし、というシーンで、主人公が一番有名な「汚れつちまつた悲しみに……」を読むのですが、そこはもう本当に、酒飲みがみんな経験しているこの感じ、つらいけれどもガーツと飲んでしまつて、ウッ！ってなる感じ。あの詩ってこういう時に読まれる詩なんじゃないかと、私は勝手に思つてそれをあてはめてしまったんですけど、どうなんですか？ 中也はすごく飲んで飲んで、ウツってなるタイプだったじゃないですか。中原 そうですね。ウツってなるだけじゃなく、周りにすごく迷惑をかけるタイプでした。他の人に絡まずにはられない。

部分では、中也のそれまでの詩の中にはない特徴が出ていると思います。

**荻上作品の中の「朗読」**

—「朗読屋」には中也の作品がたくさん出てきますが、どのような印象で選ばれましたか？

荻上 脚本は自分で頭の中で書いていくわけですが、詩を文字で読むのと、実際に声に出して読むのでは、印象がちよつと違つたりしました。それで、この場所にはこの詩だったけど、やっぱりこつちにしてみようか、みたいな入れ替え作業もありました。

—今回、脚本を書かれている時に、実際に中也の詩を声に出して読んでみたのですか？

荻上 はい。読んでみました。

**—何か感じるものがありましたか？**

荻上 子どもに夜寝る前、絵本を読んであげているんですね。大人になると、声に出して何かを読むという行為が少なくなってくるので、違う脳を使っている感じがして、すごく新鮮だった、というのもあってこの脚本を書いているんですけど。詩自体を見て感じるものがまた一個

中也って誰かに話したり、手紙を書いたりすることで、自分の考えをまとめていく人だったみたいで、だから必ず相手が必要だったんですね。必然的にお酒も絡み酒になって、それは大体いい結果を生まなくて、ケンカになって、大体中也が負けて。だから、体も心も傷ついて下宿に戻って落ち込んでいて、そういう日々をたくさん過ごしているはずですよ。

**荻上さんが選ぶ中也の詩**

—荻上さんにお気に入りの中也の詩を一篇、選んでいただきました。「月夜の浜辺」という詩ですが、どうしてこの作品をお選びになったのですか？

荻上 映像が浮かぶんですよ。さみしくて、でも美しく、孤独が漂っているという映像で……。すごく印象に残る詩でした。

月夜の浜辺

月夜の晩に、ポタンが一つ  
波打際に、落ちてゐた。  
それを拾つて、役立てようと  
僕は思つたわけでもないが  
なぜだかそれを捨てるに忍びず  
僕はそれを、袂に入れた。

月夜の晩に、ポタンが一つ  
波打際に、落ちてゐた。

それを拾つて、役立てようと  
僕は思つたわけでもないが

月に向つてそれは抛れず  
浪に向つてそれは抛れず  
僕はそれを、袂に入れた。

月夜の晩に、拾つたポタンは  
指先に沁み、心に沁みた。

月夜の晩に、拾つたポタンは  
どうしてそれが、捨てられようか？

—中原さんから解説をお願いいたします。

中原 この詩はポタンが印象的ですよね。ポタンって丸い形をしていて、ちょうど月と同じなんです。それから、貝殻でつくつた貝ポタンというものもあります。身近なものだけでも、イメージとしては月にも海にもつながっているんですね。でも、ポタンは落とされて忘れられてしまつている。多くの人にとっては忘れてしまつても困らない存在なんです。それを中也だけが拾い上げて持ち帰るんですよ。どこにも片づけてしまえないもの、そういう形でしかこの世に存在しないものがあつて、それを大切にしたいという



あり、声に出して読んでみてもまた感じるものが、違ったものがあり、ということとを体験できました。実際、この撮影現場に行くと、吉岡秀隆さんが読む声のトーンで、また違う情景が浮かんだり……。いろいろ楽しめるのだなと思いました。

荻上 えつ、それ、今日ご指摘いただいた初めて気付きました。

中原 そうなんです。一番印象的だったのが「めがね」で、登場人物がみんな海岸に並んでいて、加瀬亮さんが演じられる青年が、ドイツ語の詩を暗唱するんですね。意味はよくわからないんですけど、その朗読と海の風景と波の音と、それだけで何か染み入ってくるものがあるんです。これはやはり詩とか朗読というものの力を意識して、脚本段階から書かれたのかなと思っただけです。

荻上 なんにもない海に音楽のように詩が流れていたら、さぞかし気持がいいだろうなあ、ぐらいの気持だったと思うんですけど、それを日本語でやってみようかなんかちよつとやっぱ恥ずかしかった……。というのがあったり、あと、日本語になることによって、意味を考え始めちゃうかなと思っただけです。なので、ちよつと音楽みたいに聞こえたらいいな、と思ってドイツ語にしてみました。

中原 その時からちゃんと荻上さんの中に、詩の朗読というものがあつたのかなあと思っただけです。

荻上 そうですね、きつと。

### 中也詩の「音」の魔力

— 中原さん、今、荻上さんのお話の中で、詩を音楽のように聴いてもらえたらという話がありました。私も朗読してみても

じますが、中也の詩はすごくリズムミカルで音楽的だなという感じがします。

中原 それは中也の詩の大きな特徴だと思います。中也は自作朗読することが多かったのですが、朗読というのは、詩を伝える大事な手段だったのではないかと思います。中也の朗読はすごく独特で、草野心平という詩人が伝えていたんですけど、声はハスキーな低音だったそうなんです。それで独特の調子があつて、多くの人々が、中也の詩の朗読は素晴らしいかと書き残しています。そういうエピソードを見ても、中也は詩を書く時から、声で発想していた部分があつたのではないかと思います。

— その音楽的な部分というのが中也の詩の魅力の大きな要素の一つなんです。その音の魅力、朗読の魅力がまつた中也の詩を、中原さんにも一篇、選んでいただきます。 「一つのメルヘン」という作品です。

#### 一つのメルヘン

秋の夜は、はるかの彼方に、  
小石ばかりの、河原があつて、  
それに陽は、さらさらと  
さらさらと射してゐるのであります。

陽といつても、まるで砒石か何かのやうで、

非常な個体の粉末のやうで、  
さればこそ、さらさらと  
かすかな音を立ててもゐるのでした。

さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、  
淡い、それでゐてくつきりとした  
影を落としてゐるのでした。

やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、  
今迄流れてもゐなかつた川床に、水は  
さらさらと、さらさらと流れてゐるので  
ありました……

— (さらさら) というオノマトペが面白いですね。

中原 (メルヘン) と題されていて、お話を子どもに読み聞かせるような優しい口調が基本にありますよね。その中に(さらさら)という言葉が出てくるんですけども、陽の光が射している様子を(さらさら)と描写します。絶対日常にはない幻想的なイメージだけれども、自然に入ってくる。それから蝶が現れて、いなくなつて、今度は水が(さらさら)と流れ始めるんですね。これは日常的だけれども、その前の世界がありますから、この(さらさら)も、非常に特別な感じがしてきます。(さらさら)という言葉の響きと意味がうまく組み合わせられて

いて、これはもう中也の詩の魔力じゃないかと思っています。

— 荻上さんはどのようにお感じになりますか？

荻上 絵本を見ているような感じがしますね。子どもに読んで聴かせるような絵本の情景が浮かぶということ、やつぱりこの(さらさら)っていう言葉が、先ほどお話しした印象とは一転して、「刺さる」という感じではなく、すごく穏やかな印象になっていますね。

### 中也が読み継がれる理由

— 2017年は、中原中也生誕110年、没後80年という節目の年になります。中也の詩には、今も現代人に強く問いかけてくるものがあると思いますが、それはなぜなのでしょう？

中原 中也という人は、中也のことをダメ人間と思っていた人たちを無視していたわけではなくて、そういう人たちの批判的な視線を強く意識しながら自分の道を歩いていた人だ、と思うんですね。詩を書くということはどういうことか、詩人として生きることはどういうことかというのを考えながら書いていた。それは突きつめていけば、人間というのはどうやって生きていくべきなのか、どうい



### 荻上直子 Oigami Naoko

映画監督。デビュー作『パーパー吉野』(2003)でベルリン国際映画祭児童映画部門特別賞を受賞。『かもめ食堂』(2006)の大ヒットにより、日本映画の新しいジャンルを築く。『めがね』(2007)でベルリン国際映画祭ザルツゲバー賞、『トイレット』(2010)で第61回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。最新作『彼らが本気で編むときは、』(2017)はベルリン国際映画祭等で高い評価を受けた。CMやドラマの脚本でも活躍し、NHK山口放送局制作の地域発ドラマ「朗読屋」(2017)で脚本を手掛けた。

ろうどくや

# 朗読屋

山口発  
地域  
ドラマ

あらすじ

妻に去られ、眠れない日々を送るマモルは、24時間図書館を訪れたことをきっかけに、孤島に住む老婦人の朗読屋を始めます。やがて彼は、中原中也の詩を朗読する日々を通じ、思わぬ形で妻の思いを知るようになります。

(2017年1月18日、「再」4月22日)  
BSプレミアムで放送



# 字面は中也・音では秋聲、 「中世」という言葉に 二度騙される毎日

徳田秋聲記念館学芸員 藪田 由梨

汚れつちまつた悲しみを、かなしみ尽くせる人生はきつと幸福なのだろうと思います。大抵の人は、大抵のことに對しほがらかな顔をして生きています。それを最も嫌ったのが中原中也という人で、そんな定規みたいな「ほがらか」な顔を棄ててしまえという。

けれど「ほがらか」こそが世間を円滑にしているわけで、悲しいときに悲しいだけ、かなしんでいながら空手で日が暮れるのを見送っていいスペースはこの世界に僅かしかなく、そこを奇妙な詩人が占めているから人々はごく「ほがらか」に同僚と食事に出掛ける。いつぼう人生に椅子を失くしたと嘆く詩人はその辺りに躊躇みこんでは、いったい空が高すぎる、と呟いたり、まことに人生一瞬間の夢、と嘯いたり、ただ平穩に夕飯をとろうとする人の魂を闇雲に揺さぶつてくるので、「ほがらか」な人の半分はそれを疎ましく思い、半分はそれを眩しく思う……

中也の友人が「中也に居られるのも嫌、帰られるのも嫌」と語った言葉がとてもしつこい。天才は時に面倒くさく、そうでない人を容赦なく攻撃しては傷つ

け、なのに自分ばかりが傷ついた顔をして、あまつさえ得意な詩にうたつたりなぞする厄介な生き物——けれどそこに小さく固く蹲っている黒い塊を邪険にして追い払ってしまえば、ひどく大事なものを失ったように感じるのです。

中原中也記念館に勤務して五年、離れて五年、中也記念館から秋聲記念館に異動してパターンがあるんですね、とよく言われますが、基本的に別団体なので異動でなく、ひよんなご縁から転職をいたしました。面白いことに、中也が嫌った「ほがらか」な人々をこそ好んで描くのが秋聲という作家で、かえって中也などには興味を示さないであろう秋聲独自のスタンスに、知らず天才に中てられ麻痺してしまつた自分自身の感覚が蘇る気さえしたものです。

とは言え、あの日どうしても追い払うことのできなかつた中也は、今度は秋聲宅の庭先に居て、石をコジ起こしたりなにかしながら勝手気ままに歌っています。その歌がやはり心に沁みて美しいので、秋聲先生どうももうしばらくそのままに、とお願ひしながらこの文章を書いています。

※竹田謙二郎の日記にある記述

上記は、平成二十七年に石川近代文学館で開催された企画展「うたえい！街の仲間たち」に寄せた文章です。前号にご寄稿のあった清家雪子先生の漫画「月に吠えらんねえ」と、そこに登場する文学者たちを紹介するなか、「彼」とわたし「意外な関係」との一角にてパネル展示をしていただきました。彼との関係といつても何もないにもかかわらず、お声がけをくださったこと、この場を借りて感謝申し上げます。

幼いころ暮し、大人になった後にもその懐かしい匂いを辿って金沢を旅行した中也の語るあまからな思い出は、いままも金沢人の心を攫ってやみません。地元では金沢ゆかりの高名な詩人としてすっかり顕彰されてしまつている中也ですが、その旧居跡や通つた幼稚園跡がすぐそこにあるからでしょうか、いま秋聲宅の庭に遊ばせている中也の面差しは以前よりすこし幼い気がしています（家主である秋聲が明治初年生まれの大作家だからかもしれません）。

しかしそうセットにして語るのはこちらの勝手、その実両者に交流の記録は見つかりません。もともと接近した出来事とすれば、昭和七年八月下旬、偶然ふたりは金沢を訪れており、駅やどこかで擦れ違つた可能性こそあるものの、つまるところ彼らの接点は生きた時代と「金沢」という土地くらい、と強引に言うほかないのです。

一瞬の火花のような中也と、息の長い燐銀の秋聲——戸惑つたのは最初だけで、いまとなつてはこの対極ぶりが面白く、



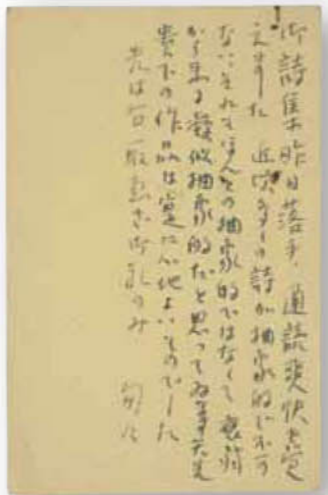
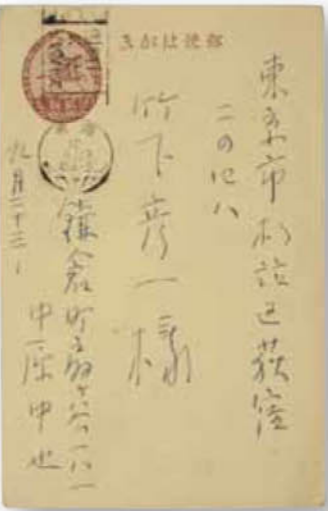
徳田秋聲昭和15年頃（自宅書斎にて写真提供：徳田秋聲記念館）

## 藪田由梨 Yabuta Yuri

1982年、金沢市生まれ。中原中也に傾倒し、金沢大学卒業後、中也の郷里・山口へ。山口大学大学院人文科学研究科を修了後、2005年より中原中也記念館に勤務。2010年11月、帰郷し、金沢出身の小説家・徳田秋聲を顕彰する「徳田秋聲記念館」勤務。

## 【新収蔵資料紹介】

### 竹下彦一宛中原中也葉書 (昭和12年9月23日)



この葉書は、竹下彦一から詩集を贈られた中也が出した礼状で、『新編中原中也全集』編集時には確認されていなかった新発見資料です。〈近頃多くの詩が抽象的で不可解、それもほんとの抽象的ではなくて衰弱から来る疑似抽象的だと思つておます〉と記すなど、当時の詩に對する中也の思いがうかがえます。

受取人の竹下彦一は、明治39年に愛知県に生まれた柔道家で、趣味で詩集や豆本などを作っていたようです。本書簡の年代に近い詩集としては、『あかるい洋燈』（日本書房 昭和8年）、『鶴』（光雲社 昭和10年）が確認されていますが、竹下の詳しい来歴や中也との関係については不明な点が多く、今後の研究の進展が期待されます。

※竹下彦一宛葉書および山岸光吉宛葉書・同献呈署名入り『山羊の歌』は、平成29年2月から4月にかけて開催された「山口お宝展」（山口商工会議所主催）において期間限定で初公開しました。

## 《翻刻》

（表）  
東京市杉並区荻窪  
二の四八  
竹下彦一様

鎌倉町扇ヶ谷一八一  
中原中也

九月二十三日

## （裏）

御詩集昨日落手。通読爽快を覚えました。近頃多くの詩が抽象的で不可解、それもほんとの抽象的ではなくて衰弱から来る疑似抽象的だと思つておます。先貴下の作品は寔に心地よいものでした。先は右取急ぎ御礼のみ。 匆々

### 山岸光吉宛中原中也葉書（昭和11年7月25日） および献呈署名入り『山羊の歌』

この葉書は知人の山岸光吉に宛てた暑中見舞いで、印刷された文面にペンで通信文を添え書きしています。第三次『中原中也全集』でその内容が伝えられていましたが、『新編中原中也全集』編集時には所在不明になつていたものです。

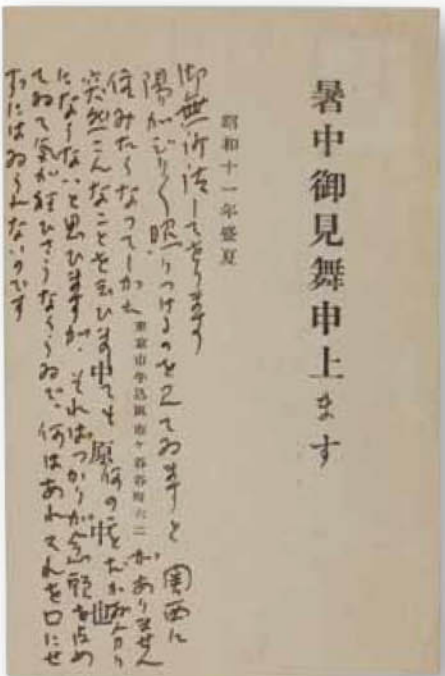
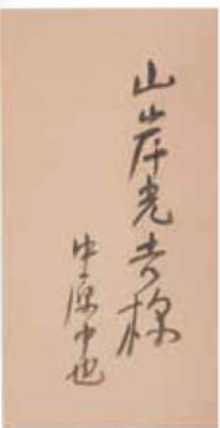
中也は昭和12年7月頃に帰郷の意志を固めていますが、その前触れともいえる心情が綴られています。

併せて、同じ山岸宛の自筆献呈署名の入った『山羊の歌』も収蔵されましたが、こちらはのたび初めて確認されたものです。

山岸光吉は、明治35年に新潟県高田市（現・上越市）で生まれ、早稲田大学建築科を卒業して建築技師となりました。在学中に学習院大学でドイツ文学を教わっていた伯父を通じて武者小路実篤ら「白樺」同人と交流していた他、演奏会会場で知り合った長谷川泰子を通じて中也とも親交を結び、

中也にフランス語を習いました。昭和4年から7年にかけてフランスに遊学。帰国後は、戦時中を除いて東京で過ごし、建築事務所などに勤めた後に、画廊を経営し、自らも絵画制作に打ち込み、平成元年に亡くなつています。

また、一人で息子・茂樹を育てていた頃の泰子に住居を提供したり、中垣竹之助との婚礼に友人代表として出席するなどして、戦後まで泰子との交友が続きました。泰子は『ゆきてかへらぬ 中原中也との愛』が刊行された際、署名本を山岸に献呈しており、このたびその署名本も収蔵されました。



葉書裏面（上）と『山羊の歌』献呈署名部分（右）





《主な展示資料》  
 竹田鎌二郎宛中原中也書簡（昭和10年7月23日）、  
 中原中也草稿（頭を、ポーズにしてやらう）（「早  
 大ノート」、中原中也草稿「雪が降つてある……」  
 （ノート小年時）

番外  
**あなたが選ぶ中也の詩**  
 —来館者アンケートコーナー—  
 好きな中也の詩とその魅力について、  
 アンケートを通じ来館者が発信できる  
 コーナーです。アンケートは随時掲示し、  
 紹介しました。

《主な展示資料》  
 「文学界」第1巻第3号、中村光夫『今はむか  
 し（ある文学的回想）』、中原中也草稿「六月の雨」、  
 「歷程」通巻第4号

中原中也記念館では、平成26年、山口  
 市内にある中学校の図書委員を対象に、  
 好きな中也の詩についてアンケートを実  
 施し、その結果をもとに、翌年に中学生  
 向けの副読本『出会い？ 発見?! 感動!!  
 中也読本』を刊行しました。

展示  
**2** 『出会い？ 発見?! 感動!!  
 中也読本』より

生前の中也は、詩人としてとりわけ人  
 気があったわけではなく、晩年に至って  
 も、多くの中堅詩人のひとりという位置  
 づけでした。しかし、中也の友人たちは  
 早くからその詩の紹介に努め、第一詩集  
 『山羊の歌』刊行後は、詩壇の反響も少  
 なからずありました。

展示  
**3** 同時代の読者が語る  
 中也の詩

中也の詩は多くの人々に親しまれてい  
 ますが、特にアーティスト・表現者と呼  
 ばれる方々に愛好者が多いという特徴が  
 あります。ここでは、詩、漫画、映画といっ  
 たさまざまな分野のアーティストから寄  
 せられた、中也の詩についてのコメント  
 を通じ、中也の詩の多彩な魅力に迫りま  
 した。

書き下ろし文・テーマ「私が選ぶ中也の詩」  
 寄稿者：浅田弘幸（漫画家）、伊藤比呂美（詩人）、  
 大林宣彦（映画作家）、荻上直子（映画監督）、北  
 川透（詩人）、文芸評論家、佐々木幹郎（詩人）、  
 四元康祐（詩人）——五十音順、敬称略  
 《主な展示資料》  
 浅田氏・大林氏・北川氏・佐々木氏・四元氏直筆  
 原稿



展示  
**1** 表現者たちが選ぶ  
 中也の詩

第14回テーマ展示

**私が選ぶ**  
*My Favorite Poem by Chiyo*  
**中也の詩**

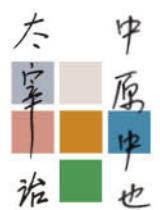
平成29年2月15日(水) ▶ 平成30年2月12日(月・祝)  
 特別企画展期間(7月27日~10月1日)は除く

中  
原  
中  
也  
生  
誕  
10  
年





特別企画展  
**太宰治と中原中也**  
 平成28年7月28日[木] - 9月25日[日]



【展示1】 文学の原点

中原中也は明治40年、山口県にある中原医院に生まれました。周囲からは、将来医業を継ぐ長男として期待されますが、次第に文学に傾倒し、中学校を落第。転校先の京都で本格的に詩に目覚め、文学を志して上京します。

一方、太宰治(本名:津島修治)は、中也の生まれた約2年後、青森県の大地主の家に生まれます。家の経営には無用の六男として育った太宰は、心中事件を引き起こしたり、左翼の非法活動に関わったりしながらも小説を書き続け、作家デビューを果たします。

ここでは、生まれ育った家庭環境の違いを比較しながら、二人の文学的背景を紹介しました。

【展示2】 太宰治と中原中也の交友

中也と太宰は、「鷗」(文学界)といった雑誌と共に作品を寄せ、同時代の文学者として活躍し始めます。昭和9年には太宰が雑誌「青い花」を創刊すると、中也もその同人となります。実際に二人は何度か会ったことがあるといわれていますが、中也が太宰について記したものは何も残っていません。また、太宰は唯一中也について言及した文章で(私は中原中也も立原道造も格



固定ケース展示

別好きでなかった(「鷗」と記しています。しかし、太宰は中也の死後、「死んで見るとやっぱり中原だ、ねえ。段違いだ。)(「檀」(小説太宰治)と語っていたといわれ、中也を高く評価していた様子が浮かび上がってきます。

ここでは、二人の直接的な交友を紹介するとともに、同時期に発表された作品を通して二人の同時代性を考察しました。

【展示3】 響き合う感性

太宰と中也は、小説と詩というジャンルの違いを超えて、深く響き合うものを持っています。ここでは、5項目を設けて、二人の感性の共通点を比較しながら作品を読み解きました。

取り上げたテーマと紹介した作品

- 1 「言葉」で読ませる  
 作品の親しみやすさ・大衆性  
 中原中也「汚れつちまつた悲しみに……」  
 太宰治「ダスゲマイネ」
- 2 前衛芸術との接点  
 中原中也「春の日の怒」  
 太宰治「葉」
- 3 「道化」を演じる  
 中原中也「お道化うた」  
 太宰治「道化の華」
- 4 童話・童謡性  
 中原中也「六月の雨」  
 太宰治「雀」
- 5 「待つ」ということ  
 中原中也「言葉なき歌」「いのちの声」  
 太宰治「待つ」「鷗」

【展示4】 太宰治の小説世界

中也の没後、太宰は不安定な生活から一転、結婚して東京三鷹に居を構えます。本格的に文筆生活に入り、女性一人称の告白体で書かれた「女生徒」、戦時下に民話をパロディ化して書かれた「お伽草紙」、戦後の代表作「斜陽」「人間失格」などさまざまな小説を生みだしました。

ここでは、中也死後の昭和13年から、昭和23年に入水するまでの太宰の活動に焦点をあて、多彩な小説の世界を紹介しました。

○主な展示資料

- 太宰治原稿「人間失格」「グッド・バイ」「お伽草紙」
- 太宰治「晩年」「虚構の彷徨」「ダスゲマイネ」「女性」
- 太宰治愛用品(ネクタイ、和服、財布、扇子)、書短冊、林忠彦撮影太宰治肖像写真、中原中也原稿「含羞」「この小児」「秋の愁嘆」、中原中也「ノート1924」「青い花」創刊号、檀一雄「小説太宰治」



DAZAI  
 OSAMU x NAKAHARA  
 CHUYA

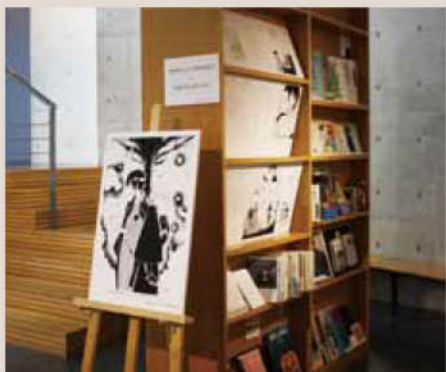


「人間失格」等原稿展示



「文豪ストレイドックス」  
 コラボレーション企画

本展にあわせ、キャラクターとしての太宰と中也が活躍するコミック「ク・アニメ」文豪ストレイドックス(原作:朝霧カフカ、作画:春河35)とのコラボレーション企画を実施しました。読書コーナーにコラボ展示コーナーを設け、描き下ろしイラストの展示の他、キャラクターとしての太宰・中也と、そのモデルとなっている実際の二人との関係や、コミックの中に出てくる二人の文学作品を紹介しました。また、館内の中原中也クイズに参加した方には、描き下ろしイラストの特製クリアファイル(限定3000部)をプレゼントしました。





# DADA 1916→1923

## ツアラそして中也

平成28年4月20日(水)～7月24日(日)

1916年、第一次世界大戦のさなかにスイスで始まったダダイズム。「無意味」を旗印に世界中へ波及したこの芸術思潮は、大正12年に発行された日本で最初のダダ詩集である高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』を通じ、中原中也にも多大な影響を与えました。

2016年はダダイズムが始まってからちょうど100年にあたります。本展では、ダダイズムの発生と展開について、また、ダダイズムが中也に与えた影響などについて紹介しました。

1916年2月5日、スイスのチュールリッヒに「キャバレー・ヴォルテール」が開店しました。第一次世界大戦の戦火をまぬがれるため、中立国のスイスにきた様々な国の芸術家たちがこの店に数多くつどい、非日常の空間として特別な意味を持つようになりま

### 展示Ⅰ DADAって何だ？

本展で取り上げた「DADA」(以下「ダダ」とは、詩人のトリスタン・ツアラらによって始められた芸術運動であり、その思想が「ダダイズム」です。ダダは既成の権威、道徳など一切を否定し、世界を意味のない「白紙」に戻そうとしました。ここでは、ダダという芸術思潮の特徴について紹介しました。

### 展示Ⅱ トリスタン・ツアラとダダの冒険

1916年2月5日、スイスのチュールリッヒに「キャバレー・ヴォルテール」が開店しました。第一次世界大戦の戦火をまぬがれるため、中立国のスイスにきた様々な国の芸術家たちがこの店に数多くつどい、非日常の空間として特別な意味を持つようになりま

### 展示Ⅲ 日本のダダ

〔万朝報〕から「マゾ」まで

芸術運動としてのダダは1923年頃には終息しましたが、芸術思潮としてのダダイズムは世界各地に広まり、それは日本にも及びました。日本におけるダダイズムは、大正12年9月に発生した関東大震災後の芸術文化に特に強い影響を及ぼしました。世界有数の近代都市・東京が地震災害によって脆くも崩れ去るのを目の当たりにした人々は、既成の価値観を破壊するダダイズムに関心を抱くようになったのです。

### 展示Ⅳ 「原始人」中也

— 中原中也とダダイズム

大正12年3月、山口中学校3年生の中原中也は成績不良のため落第。4月には京都の立命館中学へ転校することとなりました。同年に中也は高橋新吉の詩集『ダダイスト新吉の詩』を読み共鳴し、自分でも同様の詩を作りはじめます。ダダイズムはその後の中也の詩に深い影響を残したと考えられます。

中也とツアラが直接対面することはなく、文学の面においても直接の影響関係を見ることはできませんが、サーカスを題材にした詩や歌謡性など、奇しくも共通する部分が見られます。

ここでは、ダダイズムが中也に与えた影響や、ツアラと中也の共通点について、詩の鑑賞などを通じて探りました。

#### 《主な展示資料》

Tristan Tzara "Sept manifestes dada" (トリスタン・ツアラ「七つのダダ宣言」)、高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』、横光利一『欧州紀行』、吉田猪佐夢・宇佐川紅萩・中原中也『未黒野』、中原中也創作ノート「1924」、正岡忠三郎宛中原中也封緘葉書(大正14年2月23日)

#### 特別コーナー「三面怪人 ダダ」

昭和41～42年に放映された「ウルトラマン」第28話に登場する「三面怪人 ダダ」の名はダダイズムから採られています。ここでは、その浅からぬ関係について、ダダの画像パネルとともに紹介しました。



## 企画展 II

# 中也、この一篇——「サーカス」

平成28年9月28日(水)～平成29年4月16日(日)

中也の代表作をじっくりと味わう企画展シリーズがスタート。第一回は「ゆあーんゆあーんゆあーん」のフレーズが印象に残る中也初期の代表作「サーカス」です。本展では、作品の解釈や成立過程のほか、中也が生きた明治末期から昭和初期の日本におけるサーカスの歴史などを交え、さまざまな角度から作品を読み解きました。

### 展示Ⅰ 読んでみよう！「サーカス」

中也の詩「サーカス」は印象に残る言葉が多く、口ずさみやすいリズムを持っています。

ここでは、「茶色い戦争」(サーカス小屋)「ゆあーんゆあーんゆあーん」といった詩のフレーズやオノマトペ、七五調などのキーワードによって詩を読み解き、「サーカス」の魅力に迫りました。

### 展示Ⅱ 「サーカス」誕生

中也が初めてこの詩を書いた時期は特定できませんが、大正14～15年、18～19歳頃と考えられています。昭和4年、雑誌「生活者」に無題の詩として発表されたこの作品は、のちに昭和9年刊行の第一詩集「山羊の歌」に「サーカス」のタイトルで収録されました。その後いくつかの雑誌に発表するなど、「サーカス」が中也にとって自信作であったことがうかがえます。

ここでは、「サーカス」の成立過程について紹介しました。

### 展示Ⅲ 中也の「サーカス」原風景

中也は、幼い日を過ごした金沢で軽業(サーカス)を見たことを、のちに随筆「金

沢の思ひ出」に記してしています。また、友人で評論家の河上徹太郎の回想によれば、中也は「サーカス」が金沢をうたった作品であると語っており、幼少期の体験が「サーカス」の制作に影響を与えていると考えられます。

### 展示Ⅳ 日本のサーカス

ここでは、中也の心に刻まれた「サーカス」の原風景を探りました。

日本のサーカスは、古くから行われてきた軽業、曲馬といった曲芸に、幕末以降、来日した西洋のサーカス団の影響が加わり、独特の進化を遂げてきました。

### 展示Ⅴ ひろがるサーカス

サーカスは中也のみならず、多くの作家たちに創作のインスピレーションを与え、作品に描かれてきました。

ここでは、サーカスが登場する文学作品として、芥川龍之介「葱」、宮沢賢治「オツベルと象」、堀辰雄「羽ばたき」、太宰治「作家の手帖」を紹介しました。

#### 《主な展示資料》

中原中也草稿「雪が降つてある……」(ノート小年時)、安原喜弘宛中原中也葉書(昭和7年8月23日付)、中原中也『山羊の歌』、『山羊の歌』紙型、「生活者」第4巻第9号、「紀元」第2巻第3号、「隼」第2巻第6号、宮沢賢治「春と修羅」、SPレコード「サーカス(曲馬団の唄)」

#### 「サーカス」モビール

「ゆあーんゆあーんゆあーん」の文字と影がゆらゆらと揺れるモビール。平成26年度当館特別企画展「中原中也と日本の詩」において制作されたものですが、今回も展示室でひととき目を引き、好評を博しました。





2016年4月1日	特別展示:震災復興応援企画(前年度から継続) 当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介
20日	企画展Ⅰ「DADA 1919→1923 ツアラそして中也」(~7月24日) 特別展示:第21回中原中也賞(~5月29日) カニエ・ナハ「用意された食卓」
22日	第143回 中原中也を読む会 第21回中原中也賞受賞詩集 カニエ・ナハ「用意された食卓」を読む
29日	生誕祭「空の下の朗読会」 (中原中也記念館前庭) 自由参加の朗読(朗読参加者22名) 大宮エリー、塚本功 コンサート 第21回中原中也賞贈呈式 (湯田温泉ユベルホテル松政) 受賞詩集:カニエ・ナハ「用意された食卓」(私家版) 記念講演「言葉が「出現」するとき ~中也の詩をめぐって~」 講師:諏訪哲史 主催:山口市、(公財)山口市文化振興財団
5月4日	特別展示:安原喜弘文庫 第1期(~5月3日)
17日	特別展示:安原喜弘文庫 第2期(~5月8日)
27日	特別展示:安原喜弘文庫 第3期(~5月22日)
6月24日	第144回 中原中也を読む会 企画展Ⅰ「DADA 1916→1923 ツアラそして中也」見学
7月22日	第146回 中原中也を読む会 屋外展示「酒の詩」(前期)を読む「青木三造」宿酔
28日	特別企画展「太宰治と中原中也」(~9月25日) オープニングセレモニー開催
30日	プロムナード・トーク① 特別企画展解説
8月11日	プロムナード・トーク② 特別企画展解説
26日	第147回 中原中也を読む会 特別企画展「太宰治と中原中也」見学
27日	トーク・イベント 大学生と語る、太宰治と中原中也「待つ」ということ (山口情報芸術センター) コーディネーター:司会:村上林造 登壇:山口大学学生
31日	機関誌「中原中也研究」第21号発行
9月17日	公開講演「太宰治と中原中也」(セントコア山口) 講師:平岡敏夫 共催:中原中也の会
22日	演劇公演 お伽草紙「カチカチ山」 脚本・演出:オカザキケント 共催:える・うお



「空の下の朗読会」コンサート



安原喜弘文庫特別展示



トーク・イベント

9月23日	第148回 中原中也を読む会 「盲目の秋」を読む
24日	プロムナード・トーク③ 特別企画展解説
28日	企画展Ⅱ「中也、この一篇——「サーカス」」(~平成29年4月16日)
10月22日	中也命日 中也忌~幕前祭と中也に捧げる夕べ (経塚墓地、中原中也記念館) ぼうしの詩人賞~あつまれ!未来の中也たち!~ 表彰式・入選作品朗読会 メイシ交換会(中原中也記念館前庭、~10月23日)
28日	第149回 中原中也を読む会 企画展Ⅱ「中也、この一篇——「サーカス」」見学
11月1日	特別展示:安原喜弘文庫 第4期(~11月6日)
25日	第150回 中原中也を読む会 屋外展示「酒の詩」(後期)を読む「雪の宵」カフエーにて
12月10日	山羊の日(~12月11日) 特別展示:竹田鎌二郎宛中原中也葉書(昭和9年12月10日付) トークイベント 「中原中也と山口発地域ドラマ「朗読屋」 ~荻上直子がみつけた中也の魅力~」 (山口大学吉田キャンパス) 出演:荻上直子、中原豊 主催:NHK山口放送局 共催:中原中也記念館
23日	第151回 中原中也を読む会 福田名誉館長と「むなしさ」を読む
2017年1月27日	第152回 中原中也を読む会 種田山頭火の俳句を読む
2月15日	第14回テーマ展示「私が選ぶ中也の詩」(~平成30年2月12日)
18日	開館23周年
24日	第153回 中原中也を読む会 蓄音機で聴く中也ゆかりの音楽—吉田秀和と中也
25日	山口お宝展(~4月2日) 竹下彦一宛中原中也葉書、山岸光吉宛中原中也葉書、 山岸光吉宛献呈署名入り「山羊の歌」の特別展示 主催:山口商工会議所
3月1日	特別展示:「無限の前に腕を振る—中也からのメッセージ」 全国文学館協議会加盟館との共同展 「3.11 文学館からのメッセージ」への参加企画(~3月26日)
24日	第154回 中原中也を読む会 テーマ展示「私が選ぶ中也の詩」見学
31日	館報第22号発行



中也忌

中原中也の会

6月12日	中原中也の会第20回研究集会「ダダ100年」(東京学芸大学) 総合司会:疋田雅昭 研究発表「非モテなダダと中也のリア充」 発表者:野本聡 研究発表「朝の歌」の「きえてゆく」夢とダダ 発表者:池田誠 講演「中原中也とツアラの「サーカス」試論——ダダ百年をめぐって」 講師:塚原史
7月31日	会報第40号発行
9月17日	中原中也の会第21回大会(セントコア山口) 総合司会:渡邊浩史

18日	講演「太宰治と中原中也」 講師:平岡敏夫 トークセッション「中原中也の会の20年」 出演:福田百合子、佐々木幹郎 司会:中原豊
12月25日	中原中也の会第17回セミナー(セントコア山口・中原中也記念館) 講演「中原中也の初公開資料をめぐって」 講師:原明子 中原中也記念館特別企画展「太宰治と中原中也」見学 解説:原明子 会報第41号発行

ぼうしの詩人賞  
あつまれ!  
未来の中也たち!

「ぼうしの詩人賞」あつまれ! 未来の中也たち! は、山口市内の小・中学生が「中原中也」や「詩」に触れる機会をつくるために、平成28年に創設された創作詩のコンクールです。帽子をかぶった中也の写真のイメージから「ぼうしの詩人賞」と名付けられました。

今回は、市内から48作品の応募があり、その中からぼうしの詩人賞(最優秀賞)1篇、優秀賞4篇が選ばれました。審査員による選評では、「それぞれ学年に応じた言葉と感性でつづられた「あなたらしさ」の表れた作品となっており、審査は難航しました。巧みな言葉の遣い方、擬態語・擬声語をうまく取り込んだ作品、中でも中学生の作品は、中也バリのリズム感のある作品、奥ゆかしさ・不可解さのある作品等々とバリエーションに富んでおり驚かされました。」と評されています。

10月22日、中也の命日にあたるこの日に、中原中也記念館の中也記念室で表彰式と入選者本人による作品朗読会が行われ、入選者のご家族、来館者が観覧しました。表彰式では、ぼうしの詩人賞には、18歳の時の中也がかぶっていた帽子にそっくりのソフト帽が、優秀賞には当館のグッズセットが贈られました。それぞれの表彰後、緊張した面持ちで朗読をはじめた小・中学生のみなさんのまっすぐで澄んだ声が館内に響き、自身も朗読を好んだ中也にも届いたのではないのでしょうか。



ぼうしの詩人賞  
「こととはと入る おふろ」  
山口市立湯田小学校 2年 又野 莉瑚

いもうとのいもうとのことはこつつんてよんでいる  
こつつんはおふろに入るということをきかないし  
じらくそになる  
とつてもこまる  
だつて二さいだもん  
かいじゅうになるもん  
おねえちゃんてたいへん  
わたしもいもうとになりたい  
だつてじらくそがい  
いえるから  
あああじらくそいたいな

優秀賞

- 「ぼくらの戦争」  
山口市立湯田中学校 3年 中谷 涼葉
- 「わたしは」  
山口市立湯田中学校 3年 藤永 優慧
- 「コワイモノ」  
山口市立湯田中学校 2年 吉近 萌々果
- 「見上げた空」  
山口市立湯田中学校 3年 吉永 知里

山羊の日  
平成28年12月10日・11日



昭和9年12月10日、中原中也の詩集「山羊の歌」が刊行されました。編集開始から2年半の月日を経て世に出た、中也念願の第一詩集でした。

刊行から82年後となる今年、中原中也記念館では、この記念すべき12月10日を「山羊の日」と名付け、2日間にわたりささやかなお祝いのイベントを行いました。

展示室では「山羊の歌」と、その刊行日に書かれた竹田鎌二郎宛葉書(昭和9年12月10日付、湯田温泉発信)を特別に展示しました。また、各日先着10名のご来館者に、人気グッズ、まめほん「山羊の歌」をプレゼント。さらにご来館者全員に、記念館オリジナルキャラクター「中也くん」のポストカードセットがプレゼントされました。

なお、12月10日には、NHK山口放送局との共催でトークイベント「中原中也と山口発地域ドラマ『朗読屋』」荻上直子が見つけた中也の魅力(於・山口大学)も開催されました(5~8頁参照)。

平成29年は  
中原中也生誕110年、  
没後80年です。



生誕110周年ロゴマーク

さまざまな記念イベントでメモリアルイヤーを飾ってまいります。どうぞご期待ください。

\*イベントはホームページ等で随時お知らせします。



◎第22回中原中也賞

『長崎まで』

野崎有以氏



Nakahara Chūya prize 22nd



第22回

の中原中也賞は、公募および推薦による188点の詩集の中から、野崎有以氏の『長崎まで』（思潮社）が選ばれました。

野崎氏は昭和60年生まれの31歳（受賞時）。大学院で研究生活を送るかたわら、『現代詩手帖』に詩を投稿し続け、平成27年には、第53回現代詩手帖賞を受賞しています。

受賞作『長崎まで』は、野崎氏の第一詩集で、表題作を含む全12編が収められています。選考会では、散文調で書かれた作品が議論を引き起こしましたが、従来の詩と異なる新しい世界を開いたとして評価されました。

全篇行分けの散文詩であり、作者の語りたいた欲求の切なさが詩の内容の芯となっている。架空の町の架空の自伝とも読め、しかも演歌調の語りや戦略的詩的にならないで詩の言葉になっている。意表を突いた詩集として、受賞作に決定した。

（選評「より」）

まったく長崎まで何のために来たのか  
路面電車で眼鏡橋近くの電停まで行って「長崎詩情」を口ずさむ  
私が生まれた冬がない  
なかつたら作つたらいい  
作つたらいいんだ

長崎本線から見える有明海の夕日がまぶしくて両手を顔の前で広げる  
まぶしいからだけでは  
身体を透かすほどの純粋な抱擁があった  
瞬きのたびに無数の夕日の粒が海に降る  
様々な光りかたをする粒が輝きとしてそこに存在する  
こうしていつかの夕日の一粒として  
私は生まれた

夕日は繁華街のネオンが灯りを落とすように  
水平線に身をひそめてじっと夜をみつめる  
海に降った夕日の粒が夜明けまで旅をする

（「長崎まで」より）

◎平成29年度 記念館事業・関連行事予定

2017年4月-2018年3月

展示	イベント	中原中也を読む会
平成28年度企画展Ⅱ 「中也、この一篇——「サーカス」」 （平成28年9月28日～平成29年4月16日）	湯田温泉 白狐まつり （4月8日、9日）〈無料開館日〉  生誕祭 空の下の朗読会 （4月29日 中原中也記念館前庭）〈無料開館日〉	毎月 第4金曜 中原中也記念館等
第14回テーマ展示 「私が選ぶ中也の詩」 （2月15日～平成30年2月12日） ※特別企画展会期中を除く	こどもの日 （5月5日）〈無料開館日〉  中也命日 中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ （10月22日）〈無料開館日〉	中原中也の会  中原中也の会第21回研究集会 （5月21日 県立神奈川近代文学館）  中原中也の会第22回大会 （9月23日 ホテルニュータナカ）
企画展Ⅰ 「山頭火と湯田温泉」 （4月19日～7月23日）	山羊の日 （12月10日）  開館24周年 （2月18日）	中原中也の会第18回セミナー （9月24日 中原中也記念館等）
特別企画展 「詩が生まれた場所へ——中也の見た風景」 （7月27日～10月1日）		
企画展Ⅱ コラボレーション企画 前期 「コミックのなかの中也」 （10月4日～平成30年1月21日）		
企画展Ⅱ コラボレーション企画 後期 「山口盆地考2018 ……吹き来る風が……」 （平成30年1月24日～4月15日）		
第15回テーマ展示 「中原中也の散歩生活」(仮) （平成30年2月15日～平成31年2月下旬）		

※日程等、変更の場合がございます。

中原中也記念館 館報【第22号】平成29年3月31日

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉一丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。